
暇な魔王の一日 午後

ziFuka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暇な魔王の一日 午後

【Nコード】

N8003Z

【作者名】

z i F u k a

【あらすじ】

二人の姫に制裁を加えたレオン。

裏で暗躍する何者かの影。

暇な魔王の日々がついに終わる！

（『暇な魔王の一日 午前』を先に読むことを強く推奨します）

（前書き）

あらずじにも書いてあるとおり、先に『暇な魔王の一日 午前』を読まないとキャラクターの説明などがされませんので、ご了承ください。

再構成したときに生じた分を分けたものです。午前よりもだんだんとシリアスになっていきますので、違った面白さを感じてください。

勇者と魔王。

人間たちの味方、人々の救世主、闇を打ち倒し世界に光をもたらす者。それが勇者。

対して魔王は人間たちの敵、魔族の頂点に君臨する者、世を混沌へと落とす者。

古い御伽噺やファンタジーの小説では必ず争う二人で

「……………」

「あ……………」

「……………」

「……………」

「……………なあ、お前」

「な、なんでしょうか魔王様……………」

「俺が何を言いたいか分かるか？」

「……………はい」

「確かお前、前にも同じようなことでぶっ飛ばされてたよな？」

「……はい」

「俺の記憶じゃ、お前は星になって戻って来なかったと思うんだが？」

「その……先ほど戻って参りました」

「ほう？　どこまで行って帰ってきたんだ？」

「ミルト村近くの森まで飛びました」

「で、数時間で帰ってきたと？」

「とても大変でしたが……駄目ですか？」

「徒歩で数ヶ月もかかるのに、お前は数時間で帰ってきたのか」

「はい……」

「ふむ、そこは褒めるとしてだ。話を戻そうか」

「できれば戻さないで欲しいです……」

「何か言ったか？」

「いえ……何でもありません」

「では聞こう。……今何をしていた？」

「……今回は私愛用の書に抱負を書き込んで飛ばされたので、今回は書ではなくメモ帳にしてみました。それから仕事は私には丁度無かったので、魔王様がおっしゃった個人的趣味に走ってもサボリにはならないはずです」

「ずいぶんと今回は威勢が良いじゃねえか。ならそこに立てかけられているはたきと箒は何だ？」

「それはおそらくメイド達が忘れていった物だと思います」

「ではあそこの本が散乱している机は何だ？」

「……あれはおそらくルナ様があそこで本を読んでいたのだと思います」

「だったら何で机の引き出しや近くの本棚まで荒らされているんだ？」

「…………ルナ様が何かを探していたのでしょう」

「じゃあ…………これは何だ？」

「それは私の！？」

「ああ。お前が愛用していた書だ。そしてお前が日々この部屋に隠していたのもこの書だよな？」

「な、なぜそれを！？」

「お前は城に戻ってから仕事の続きをしているふりをし、この部

屋へ向かった。そして部屋に入ると一目散にこの書を探した。なぜならお前がぶっ飛ばされたときには普段隠しているこの書が机の上に出しっぱなしになっていたからだ。

いつもなら他のメイドや執事が隠してくれているだろうと信じ、あの本棚の二段目の真ん中、緑色の偽装カバーを付けた本を探したが無かった。焦ったお前は本棚の本をあらかた出し、机の引き出しやタンスを探し回り、そのメモ帳を見つけた。

おそらく自分の考えた“抱負”を忘れないうちに書きたかったのか、それとも単に衝動に駆られたのかは知らないが、お前は書の代わりにメモ帳に綴ろうとした。そして俺が来たからもう開き直って上手い言い訳をしようと考えていたんだろう？ 最初の沈黙で

「……………！！」

「お前は本来なら東の二階、ベランダにいるはずだ。なのになんで西の一階のここにいる？」

「そ、それは…………」

「いい加減白状したらどうだ？ 極北の酷寒山脈まで飛ばされたくないだろう？」

「……………」

「お前のことなど全てお見通しだ」

「……………参りました。申し訳ありません魔王様」

「どこに飛ばされたい？」

暇な魔王の一日

魔王城。

そこは魔族の王が暮らす悪の居城とある一室でそれは行われていた。

「我等が主、今宵の作戦は準備万端なのですか？」

「ああ。先ほど連絡が回ってきた。遂に我等の時代がやってくるのだ」

「ですがよろしいので？ あの魔王様にたてついて無事に済むはずがないのでは？」

「平気だ。ちゃんと策を練ってあるから安心しろ」

「それなら安心です」

「では皆の者……解散。我等が主に勝利を」

『我等に勝利をー…！』

声を抑えて敬礼をし、続々と部屋から立ち去っていくのを見て、彼は今後の計画を頭に浮かべる。

「計画に支障をきたさない程度に私からも一手を打っておきます」

か……」

暗闇の中、蝋燭を片手に巻き角の青年は笑みを浮かべた。

所変わってここは城の食堂。

端から端まで何メートルもありそうな広さの食堂で、レオンたちは一角に座っていた。

レオンは一番端の一人席で、4人のお姫様達はレオンから少々距離を置いて座っている。

いつもなら1、2席分しか離れないのだが、数時間前のこともあり5席分くらいの距離があった。

テーブルには数々の料理が並んでおり、豪華な食事となっているのだが……

「……なあ、バトラー」

「何でしょうか？」

「なんで俺の所だけ料理が無いんだ？」

レオンの前にあったのはいくつかの食器のみ。

向こうへと目を向ければちゃんとお姫様達の前には料理が並べられている。

数時間前に骸骨の溢れる地下牢獄へ連れて行かれ、ハートブレイクを起こしたのにも関わらず、いつものように食事をしているアロ―ネにはさすがのレオンも驚いたが。

レオンの問いにバトラーは淡々と答える。

「今回は趣向を変えまして、コース料理にしたのです。ほら、前菜が来ましたよ」

「これは……」

レオンの前に運ばれてきたのはカラフルな野菜が入ったピラフのようなものだった。しかし野菜の一つ一つの色がとても鮮烈で、目が痛くなってくる。料理の裏の何かを察知するようにレオンが顔をしかめる。

「お前……この野菜は食用なのか？」

「ええ。ビビッドベジタブルのピラフにございます」

「俺の記憶が正しければ……確かそれは花火に使われる色つきの火薬じゃなかったか？」

ビビッドベジタブルとは、名前のとおり強烈な色の野菜のことで、乾燥させて粉末にすると発火性を持ち、もともとの色の炎を上げるという不思議な植物である。形はトマトのように丸く、その色は赤や青など、少なくとも食欲をそそる色ではない。

料理を見ていたルナ姫とチル姫が怪訝な顔をする。

「いいえ。乾燥させなければ食べれるのです。それにこのビビッドベジタブルは庭で栽培していた物ですよ？」

「おいおい、それってまさかとは思うが部下が栽培していた花火用のやつじゃないのか？」

「違いますよ。庭の発火草の隣に植えていたものです」

「それだよ!」

レオンが怒ると、バトラーは渋々料理を下げるようメイドに命じる。

「別に食べても平気ですと申し上げましたのに……」

「……食べると胃酸と反応して燃えるって本に書いてあった」
「えっ!?!」

「せめてまともなものを出せよ……」

「ではこれならいかがでしょう。ブルームサラダにございます」

「違う前菜じゃないのな……」

次に出されたのは皿に花や葉の入った普通のサラダだった。色も先ほどのように強烈ではない。

「やっと普通のが……って」

「どうなさいました魔王様?」

レオンは近くにあったフォークを取り、サラダの葉をどけていく。そして何かを見つけるとおもむろにそれをつまみあげる。

「……バトラー、これは何だ」

レオンがつまんでいたのは数ミリ程の葉についた紫の色。バトラーは表情一つ変えることなく答える。

「成長途中で色が付いてしまったのでしょうか。毒味もさせましたので平気です」

「……なら平気か」

つまんでいた葉をそのまま口の中へと放り込み、レオンはサラダを食べ始めた。

それを見てバトラーは微笑を浮かべる。

「……どうかしたのか？」

「いえ、何でもありません。お口に召したようで安心したのです」

「そうかい」

そうこうしている内にレオンはサラダを完食し、メイドに皿を下げさせる。

そのレオンの平常ぶりにバトラーが少し眉を動かす。

「あの……魔王様？」

「ん？ 何だ？」

「その、何ともないのですか？」

「何が？」

「いえ、何でもございませぬ。忘れてください」

「？」

「……ライアーリーフ、食用のブルーメリーフと非常に似ていて紫の一点が特徴。食べると最悪死んじやう」

「……チルちゃん」

「はい……ミリムさん」

「……聞かなかったことにしましょう」

「そうですね……」

「なあ、いつになったら何の疑問も持たずに普通の食事ができるんだ？」

「ただ何も考えずに食べるのが良いかと」

「途中絶対に食べれないものがあつたのか？」

「いいえ。あれは確かに食べれるものでした」

「金属だつたのか！？」

「金属ではありません。イートメタルです」

「メタル（金属）じゃねえか！」

「eat^{イート}（食べる）メタルです」

「ナイフで切れなかったぞ！」

「そのまま食べるのです」

「もういい！」

と以上のようなことが途中で起こり、レオンは食堂を後にしてしまつたためにフルコースは中断となつた。

幾度もミリム姫、チル姫は食欲の失せるような衝撃を受けたためにあまり食はず、恐ろしいことをぼつぽつと言つたルナ姫とまつたく気にするそぶりもみせずただ目の前の食事に専念していたアローネ姫はいつもどおりの食事を終えていた。

その後チル姫とミリム姫はお互いを見て、

「……チルちゃん」

「何ですか……」

「とんでもない昼食だったわね……」

「そうですね……」

『はあ……』

同時にため息を漏らした。

これ以降チル姫とミリム姫は気にしないように心がけることを目指したらしい。

波乱の昼食の後、いつものようにレオンが勇者の相手をしたり、アローネ姫が罾を仕掛けているところを発見されて鬼ごっこになったり、ルナ姫は相変わらず図書室にこもっていたり、ミリム姫とチル姫が気分転換に散歩をしていたりと時は流れ、夜になる。

王座の間ではレオンが玉座に気だるそうに座っており、またやって来た勇者の相手をしていた。

「……………はあ。暇だ。暇すぎる」

「死刻ム爪えええつ！！」

「ダークネスボルトお！！」

「滅びの火炎つ！！」

「よりによって何で勇者のクセにこんな黒いのが来るかね？」

「くそつ、なら……」

我は理性を捨て、狂気の鬼と化す。契約を捧げ、我に力をつ！
これでも喰らいなあああああ！！」

「弱いくせに騒ぐなあ！！」

「ほごっ！！」

「なっ、いつの間に……………！！？」

「くうつ、俺は、俺はあつ！ 勇者になるんだああああ がは
っ！！」

「サイモン！？ ロビン！？ わっ来るなあー！！」

[illegible]

「はあ……ため息しかでない」

「お勤めご苦労様です魔王様」

「ああ……バトラーか。いつものように頼む」

「分かってますよ」

戦闘が終わつたのを見計らつてバトラーがやってくる。そして毎度のようにお決まりの魔法を使い、倒れている三人を遠くへ飛ばす。レオンはまた玉座へと戻り、肘をついてだるそうに前の扉を見る。ちようど扉はさっきの三人が入ってきたことにより開き、城の前の森と夜空が広がっていた。

「やけに今日は弱いのかきりたくさん来やがったな……」

「そうでしょうか？　いつも通りにしか私には見えませんでした
が」

「そうか……？ 俺の気のせいかな？」

「はい」

「……ところでバトラー、最近の人間どもの動きはどうなってるだ？」

「まだ戦争が長引いておりますよ。なんでもそれに巻き込まれた

魔王もいるみたいですわね」

人間界にいる魔王はレオンだけではない。他にもピンきりの魔王が存在し、それぞれが城を構えている。

かつて人間界では勇者VS魔王の構造で成り立ち、世界が動いていたのだが最近では国同士の戦争にもなっていた。

そのため魔王の城が戦火に巻き込まれたりすることもしばしばあったのである。

……これが原因で弱い勇者ばかり来るのは余談だ。

「まだやってんのかよ。なんなら、俺が介入してだな……」

「駄目です」

「ちつ。いいじゃねえかよ別に」

「何度も言うようですがあなたは魔王なんですよ？ この城にいてももらわないと困ります」

「なんでだよ。勇者が来たら部下に戦わせりゃいいじゃねえか。そもそもいきなり魔王との対決なんて道理に反するってもんじゃねえの？ 何にしても手順ってものがあるじゃねえか」

「そんな道理はありませんし、そうしたら今度は魔王様が城に居なくなるではないですか」

「俺が不在の時のためのお前じゃないのか？」

「違います。私はただの執事長であり、魔王様を非戦闘の面で補佐するだけです」

「お前戦えるだろ」

「魔王様には遠く及びません」

「一人でうちの兵士1000人倒して一騎当千したくせにか？」

「まぐれです」

「なんだよまったく……あつ」

流れるような会話の後、レオンが何かを思いついたような仕草をするとバトラーは次の台詞を期待しているかのような笑みを浮かべる。

近くにいた魔王の部下達にも緊張が走る。

そしてレオンが発した言葉は、

「お前が魔王になれば良いのか」

バトラーの期待通りの言葉だった。

「そうだよ。お前を魔王にしてみえば親父みたいに俺もこんなことしなくて良いもんな。うん、それがいい」

「いえ、私には魔王になる資格など……」

途端にバトラーの言葉に嘘くささが混じり始める。だがレオンは気づいていない。

「いや、あるにはあるぞ？ “魔王の命令は絶対” って昔あの糞

親父が言ってた気がするしな」

「ですが“魔王の血族に次期魔王の座は渡される”のでは？」

「……俺の言うことが聞けないのか？」

「いえ……くくっ」

バトラーが思わず笑い声を出してしまう。それに待機していた部下達にもまた緊張が走る。

王座の間の外では張り詰めた空気が流れ、今か今かとその時を待つ。

「なんだよ急に、気持ち悪いいな」

「すみません。思わず……」

「では今日からお前を魔王に命じる」

「……………」

「後はよろしく頼むぜ。……やっとこれでくそつまらない日常から抜け出せる」

その時が、来た。

バトラーは今までに見せたことの無いような笑みを浮かべ、けのびをするレオンの方を見て一言。

「……………その言葉を待っていましたよ」

「は？今おまえ何て……」

バトラーは高々に手を仰ぎ、指揮官のように命令を下す。
計画の成功を告げる命令を。

「総員！ 配置につけ！ 今こそ下克上を果たすのだっ！！」

『おおーーーーー！！』

「まずはそいつを追いつせ！！」

待ち構えていた部下達がぞろぞろと扉から現れ、バトラーの後ろに横一列の隊列を作り上げる。そして手に持った多種多様の獲物をレオンの方へと向ける。それが意味するものはつまり、

「へえ」

謀反である。

「面白いことをしてくれるじゃねえか。バトラー？」

「ええ。朝から計略を巡らしたかいがありましたよ。元・魔王様？」

バトラーは見下したような表情でレオンと対峙する。手の上で踊らされていたにも関わらず、レオンはどこか嬉しそうである。

「いい度胸じゃねえか。ようするに最近の退屈さはお前が原因だった訳だ」

「……それは知りませんが、まあ結果的に良いものになったのなら私が原因でも構いませんよ。ですがあなたは逆らえないはずですよ。魔王の命令は絶対”なのですからねえ?”」

「ははっ。良いねえ。だが俺がこんな楽しいことをすぐに終わらせるとでも?」

「何をするつもりです? どちらにしろあなたには何もできませんよ」

レオンとバトラーの言葉の応酬がなにやら陰悪なものになっていくにつれ、士気の良かった部下達の背筋が凍っていく。

「お前への対応はこの謀略に免じてチャラにしてやる。だがお前ら、俺にたてついたらどうなるんだっけなあ?」

『ひっ!?!?』

レオンは不敵な笑みを浮かべて部下達の方を見つめる。その狂気じみた何かを感じた部下たちが逃げ出そうと引け腰になり、武器を向ける手を震わせ始める。

「うるたえるなっ! 隊列を乱すんじゃない!」

『は、はいっ!!--!』

だんだんと地響きが鳴り始め、周りの石ころ等が浮き始める。

「……一度城を出て行ってやる。準備、しとけよ?」

レオンは一瞥すると、正面の大きな扉に向かっていき、ゆっくりと扉を開けていく。

この空間に敷き詰められた威圧感、プレッシャーのせいか景色がスローモーションに見える。

部下達にはその動作の一つ一つが気が気でなかった。

「さらばだ。そして次に俺がここに来る時は……」

扉が開け放たれ、そこから見える白い背景とともにレオンがだんだんとこちらへ顔を向けていく。

その顔に映るものがどんなものか、部下達には非常に怖かった。バトラーだけはただ一人、まっすぐに裏切った主へ目を向ける。

「……地獄にしてやるからな？」

『ひいつ！？』

レオンのその一言と共に、扉から強大な殺気が突風のように吹き荒れ、部下達に吹き抜ける。

一瞬にして士気が無くなり、全員腰を抜かしてその場にへたりこんでしまう。

部下達が見たレオンの表情は……、

セイゼイ楽シマセロヨ？　ブツ潰シテヤルカラ。一人残ラズナア！

レオンは振り返り、扉の向こうへ歩いていく。

高笑いを上げながら、ゆっくり、ゆっくりとその一步一步を踏みしめるように。

[illegible]

扉が独りでに閉まっていき、ドタンという重苦しい響きと共に、あの高笑いがその場に残る。

部下達はその時思った。

こんな事するんじゃないかと。

強く、強く後悔した。

バトラーさえも顔をしかめて今後の準備に悩み始める。

元・魔王レオン・ド・ザインは、自らを裏切った部下達と執事長に、

破滅という名の絶望を与え、自分の城を後にした。

こうして、暇な魔王の一日は、終わった。

(後書き)

〽楽屋裏にて〽

「ああ〜やつと終わったな」

「そうですね。皆さんご苦労様です」

「私こっちじゃ出番がほとんどないんだけどー？」

「……うん」

「私とチルちゃんはあまり良い役ではなかったけれど、出番はあったわよ？」

「そうですね」

「再構成前の話なんて一日ですまなかったしな」

「あれは統一感もなくて無駄にグロいところもありましたからね」

「まあ、少しはマシになったんじゃないの？」

「ま、私の活躍っぷりもあつたから良しとしよう！」

「結果的に暴走しただけだと俺は思っぜ？」

「それでもあのはっちゃけっぷりは楽しかったよ？ ……怒られるまでは」

「自業自得ね」

「そうですよ。私なんてほとんどばっちりみたいなものでしたよ?」

「……私は逃げれた」

「でも皆さん全員にスポットライトは当たったんじゃないですか?」

「言われてみればそうだな」

「前の人たちもチヨイ役でいましたからね」

「結果オーライでしょ!」

「それじゃ、これを読んでくれた皆さんに感謝しましょう!」

『……え?』

「……え?」

「感謝なんて必要あんのか?」

「で、でも一応した方が……」

「平気ですよ。見る人なんてあまり居ませんから」

「それでも……」

「ここはこんな感じが合ってるのよ」

「そうそう!」

「……同感」

「え、えとえと……」

「それでは、解散!」

『おおー!』

「ええー……、あの、この本を読んでくれてありがとうございます」
「……」

私からも、この本を読んいただきありがとうございました。
ではまた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8003z/>

暇な魔王の一日 午後

2011年12月25日18時50分発行